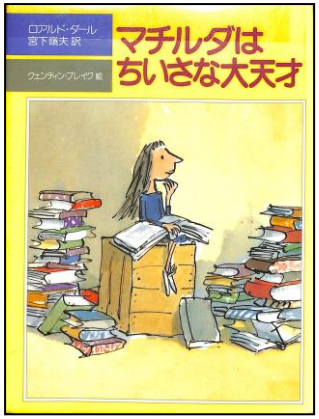
ほんがいっぱい よんでみよう！

おすすめのほん

５・６年生のための本

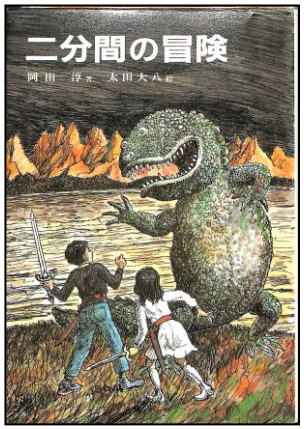
①『マチルダはちいさな大天才』

ロアルド・ダール／作　宮下嶺夫／訳
クェンティン・ブレイク／絵　評論社《Ｆダ》



五歳のマチルダは『怒りの葡萄』も読んでしまえば、１４×１９も暗算でやってのけてしまう。けれども、サギ師の父親や恐ろしい校長先生はマチルダを悪ガキと呼ぶ。彼女は頭と超能力を使って大人たちに立ち向かう！

②『二分間の冒険』



岡田淳／著　太田大八／絵　偕成社《Ｆオ》

悟は学校で人間の言葉を話す黒猫に会う。黒猫は悟を、この世とは別の時間が流れる世界に連れて行く。そこには、恐ろしい竜がいて、なぞに答えられない者は老人にされてしまう。はたして悟は竜をたおすことができるだろうか。

③『ぼくと石の兵士』

リサ・トンプソン／著　櫛田理絵／訳
PHP研究所《Ｆト》

いつも話しかけていた公園の兵士像がこわされることを知ったぼくは、新聞社と市議会へ反対のメールを送った。工事はまだ始まっていない。悩んだぼくは、市議会の人も来る学校図書館の式典で、自分の詩を読むことにした

④『ベランダに手をふって』

長江優子／作　岩波書店　《Ｆナ》

小学五年生の輝は毎朝、ベランダで見送ってくれるお母さんに手をふり返す。こんなふうに見送ってもらうのは大げさだと輝も思っていたが、特にやめる理由もなく、一年生からこの習慣は続いていた。しかしある日、偶然それを見た智博に「マザコン」とからかわれ…。

⑤『縄文の狼』

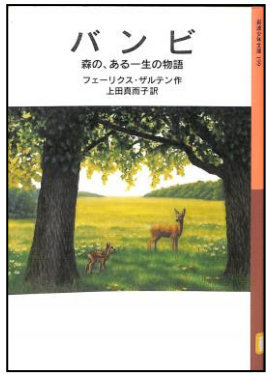
今井恭子／作　岩本ゼロゴ／画　くもん出版《Ｆイ》

縄文の時代、狩猟をしながら山中を旅して暮らすツキノデの一族は、ある日、赤ん坊を狼にさらわれてしまう。悲しみに暮れながらも、「あの子は生きている」と信じる母親。二月たった頃、川で狼の痕跡を見つけたツキノデたちは、ついに狼の巣穴を突き止める！

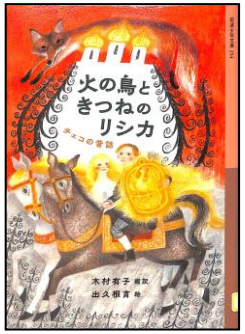
所沢市立所沢図書館　２０２１年

⑥『バンビ　森の、ある一生の物語』

フェーリクス・ザルテン／作　上田真而子／訳
岩波書店《Fザ》



バンビは、森で生まれた小さな鹿の子。はじめて草原に出たときは、夢中でかけまわりました。やがて狩人におびえ、恋をし、バンビは少しずつ成長していきます。



⑦『火の鳥ときつねのリシカ』

木村有子／編訳　出久根育／絵　岩波書店《M》

むかし、ある美しい庭に、毎日金色のりんごがなる木がありました。しかし次の日になると、金色のりんごはどこかに消えています。王さまは、王子たちに、盗んだ者を探させますが…。

⑧『みみずのたいそう』

神沢利子ほか／著　市河紀子／編　西巻茅子／画
のら書店《９１．１》

「つちのなかから　とびだして　みみずのたいそう　ぴんぴこぴん……」（「みみずのたいそう」）ほかにも、「おならうた」など、楽しい詩がたくさんあるよ。

⑨『山をつくる』

菅聖子／文　小峰書店《６５》

東京都檜原村に、林業の会社があります。その名も「東京チェンソーズ」。林業とは、一体どういう仕事なのでしょうか？　実際の仕事や働く人の様子を、この本で見てみましょう。

⑩『パラリンピックは世界をかえる』

ローリー・アレクサンダー／作
アラン・ドラモンド／絵
千葉茂樹／訳　福音館書店《２８．９》

ルートヴィヒは、下半身まひの患者を懸命に看病し、彼らに生きる希望を与えた。ある日ルートヴィヒは、治療にスポーツを利用することを思いつき、車いすでできる運動を、リハビリに取り入れる。

⑪『海べをはしる人車鉄道』

横溝英一／文・絵　福音館書店《６８》

今のように新幹線がはしるずっと前。小田原と熱海をつなぐ海ぞいの線路には、人が押してはしる人車鉄道が開通していました。人々の移動を支えた鉄道の歴史を見てみましょう。

⑫『この世界からサイがいなくなってしまう』

味田村太郎／文　学研プラス《４８》

サイはサバンナで無敵の生き物で、百獣の王ライオンでさえうかつに近寄れない。そんなサイが、２０年後には絶滅するかもしれないという。その原因は、サイの角をねらった密猟だった。

⑬『万葉と令和をつなぐアキアカネ』

山口進／写真・文　岩崎書店《４８》

新潟県柏崎市にある常蔵さんの田んぼでは、絶滅の危機にあるアキアカネが毎年大量に羽化する。他の人の田んぼと何が違うのだろう。秘密は、常蔵さん独自の米作りにあった。